澎湃

麗朱夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

澎湃

【Nコード】

N3912Y

【作者名】

麗朱夜

【あらすじ】

一つの大陸で、二つの陣営がぶつかり合う。人々はその潮流の中に巻き込まれていく。男性主人公、女性主人公、二人の視点から書いていきます。

連合編 第一部 第一章

どこからともなく現れた騎兵の集団が、瞬く間に野営地を騒然とさせた。

馬蹄が鳴り響き、大地が震え、かがり火が倒される。

炎は一瞬のうちに周囲の草へとその触手を伸ばし、辺りは一気に熱気と煙に包まれる。

「敵襲!! 敵襲!!」

見張りの兵士が遅過ぎた叫び声を上げ、貴重な夜の眠りを妨げられた兵士たちが、慌ただしく自分の武器を取り上げる。

しかしながら、彼らが完全な戦闘態勢に入るには、もはや遅きに失っていた。

騎兵の集団は、すでに殺戮を欲しいままにしていたのである。

ある者は剣で切り裂かれ、ある者は槍で突き刺され、ある者は矢で射殺された。

草が燃え上がる臭いに混じり、鮮血の臭いが辺りの空気を満たしていく。

栗毛の馬を駆る騎兵は、逃げ惑う敵兵と遭遇した。

その敵兵は明らかに自分のほうが不利なのにもかかわらず、戦う意思を示した。

剣を構えると、言葉にならない叫び声を上げて突進する。

騎兵も構え、その攻撃を迎え撃った。

一合、二合、三合　と、剣が交えられる。

月光をかき消す程の炎が燃え上がる中で、剣閃が異様な煌きを発し、戦う二人を緊張の極へと誘う。

やがて、騎兵は鎧の中でひやりとしたものを感じ始めた。

自分の技倆が、決して相手を上回らないと悟ったのである。

相手は追い詰められてはいるが、弱兵というわけではなく、確実に自分の剣に応えるのだ。

だが、騎兵は馬首を返してその場から逃げ出すようなことはしたくなかった。

彼らが夜襲を仕掛けた目的は、一人でも多くの敵兵を殺し、敵の士気を削ぐことであつたから。

何度もの剣撃で、手から腕が痺れ始めていた。

しかし、騎兵は狙いを定め、敵兵へと剣を繰り出した。

渾身の一撃と言っても良かったかもしれない。

その一撃を、敵兵は驚くべき力で跳ね返した。

騎兵の手から剣が飛び、勢いよく大地に突き刺さった。

すぐさま、騎兵はもう一本の剣を鞘から抜き放つ。

今度は外さない。外せない。

柄を握る手に力を込める。

もう一度、剣を繰り出そうとしたまさにその時、横から飛んで来た矢が敵兵の首を貫いた。

豪弓であった。

敵兵は、もはや馬上の人ではなくなっていた。

騎兵は冷静さを保ちつつ、矢の飛んで来た方向を一瞥した。

炎の中を縫って、弓と矢を携えた者が現れる。

明らかに弓兵　騎兵の仲間であった。

「勝つたな」

「……ええ、勝ったわ」

騎兵は暑苦しい兜を脱いだ。

兜の中から、長く茶色い髪がこぼれる。

うら若い女性であった。

陶器のように滑らかな白い肌の上を、汗が流れ落ちる。

その汗が熱さによる汗なのか、それとも冷や汗なのか、彼女自身にも分からなかった。

連合編 第一部 第二章

ケーテコツド 彼らが本拠としている街に戻る頃には、既に太陽が顔を出し、その溢れんばかりの光を地上に与え始めているところであった。

ディーナは甲冑や武器といった自分の商売道具から解放されると、あてがわれている宿へ直行し、ベッドに横になった。

心身共に、緊張はまだ解けていなかった。

戦いの後は、名状しがたい快感に浸って戻って来る時もある。

だが、今日はそんな快感は皆無だった。

苦々しさだけを感じる。

目を閉じて、虚心になろうとしても、それは無駄な努力というもののようにであった。

彼女は横を向き、壁を睨み付けるようにして見つめ、しばらくそうしていた。

やがて起き上がり、汗ばんだ服を脱いで、宿で働いている女たちが洗ってくれた服に着替える。

彼女は洗濯をする必要が無い。

それは自分の仕事ではないから。

宿の女たちは、手が荒れてひどいと嘆く。

だが、彼女はそれが無い代わりに、肉刺すしができ、ごっごつした手になっていく。

女性の手から程遠くなる。

ディーナは部屋を出て階段を下り、一階の食堂へ行った。

日が暮れるとたちまち酒場と化すが、昼間のうちは平穩な食堂だ。

椅子に座り、野菜や豆がふんだんに入ったスープをすする。硬いパンをかじる。

給仕の女が、今日のスープは美味しいわよ、と言っていた。

だが、美味しさを感じない。

そもそも食欲が無い。

ただただ義務的に食べる。

そんな彼女に、一人の男が近づいて来た。

漆黒の髪に、漆黒の瞳。

一見するとやや痩身のように見えるが、それなりに筋肉が付いており、背も高く、引き締まった体型の持ち主である。

ハンサムと言っても良いが、野生的な荒々しさのほうが目立ち、貴公子然とした要素は全く感じられない。

彼は片手にワインの瓶を持ち、ディーナの向かいの椅子に腰を下ろして、行儀悪く足を組んだ。

「夜襲が成功したってのに、シケたツラしてんなア」

彼女は男を一瞥し、彼の言葉に答えずにスープを飲んだ。

そして、ぼそりと口を開いた。

「朝からワインを飲んでいるの？ ほどほどにしないと潰れるわよ」

「ワインは水代わりだ。この国の水は飲めたもんじゃねえ。故郷の水が一番ってやつさ。お前もそう思うだろ？」

「さあ…… 故郷の水が美味しかったかどうかなんて、もう覚えていないわ」

彼女の冷めた口調に驚いた様子もなく、男はワインを豪快に飲んだ。

「この国の水はイカれてるぜ。地下から汲んでるんだか、川から汲んでるんだか知らねえけどよ」

「あなたには帰る国がある。でも、私には無い。滅んだ国の水の美味しさなんて、思い出しても意味が

無いわ。今いる場所の水で満足なのよ」

「そんなに簡単に忘れられるもんかあ？俺はこの国に来たことを既に後悔してるぜ。今すぐ帰りてえくらいだ」

「祖国を愛しているのね」

ディーナは少しだけ笑って、パンをちぎりながら言った。

「そんな大袈裟なもんじゃねえ。“住めば都”って言葉が信じられねえの。俺らの国だって、いつ滅ぶかわかったもんじゃねえしよ」

男はテーブルに肘を付き、ディーナのほうへ顔を近づけ、囁いた。

「上の奴らは、夜襲が上手くいったんで狂喜乱舞してる。敵さんが撤退するだろうと思ってる。」

だが、そんなに上手く事が運ぶと思うか？奴らが大人しく国に帰ってきてくれると思うか？

「きつとまた攻めてくるわ。それも死兵と化して。国の威信がかかっているのよ。彼らはこのケーテコッドを落とすまで諦めない」

「この国のお偉いさん方は馬鹿ばかりだが、ありがたいことに我らが総司令官殿は唯一まともだ。」

なんとか策を練ってくれればいいがな」

「ハーベックは分かっていると思う。彼は良識家だし。……大体、あの川を渡るのそんなに難しくもないのよ。」

急流ってわけじゃないし、ただ川幅が広いだけ。彼らは近いうちに

また来るわ」

「総力戦なんて言われたら俺はもうトンスラするぜ。そこまでやってられっかよ」

「情けない男。この大陸に逃げ場所なんてあるのかしら？」

「ビビってるわけじゃねえよ。めんどくせえ事はしたくねえだけ」

「呆れるわね」

デイナーは無表情のまま言葉を返し、スープをかき混ぜた。

まだ飲み終われないことに対して、ため息が出そうになる。

男は行儀悪くワインをラッパ飲みしていたが、窓のほうを見ると、急に体を硬直させた。

「やべえ、シギだ！」

彼は慌てて立ち上がり、食堂の裏口へ行くこうとする。

「何をしたの？」

デイナーは眉をひそめた。

「話してる暇はねえ。またな！」

彼はそそくさと食堂の奥へ消えた。

と同時に、表口から二人の男が入って来る。

一人は壮年であり、もう一人は若者であった。

「今までここにピアーズが居ただろう。お前と話していた」

壮年の男が言った。それは質問ではなく、確認。

「ええ、話していたわ。食事をしているところに彼が来たの」

ディーナは男を見上げた。

茶色い髪に、草原を思わせる緑の瞳。

だが、左目は潰れている。

額から頬まで縦に付いた剣創が痛々しい。

「私には話してくれなかったんだけど、彼は何をしたのかしら？」

「俺らのワインを掠めやがった。今や貴重な、ユドウス産のワインをな」

ユドウスは彼らの祖国である。否、祖国であった。

彼らもまた、ディーナと同じく帰る国を持たない人間である。

「それは……褒められたことではないわね」

ディーナは内心呆れた。

相手が激怒すると分かりきっている物を盗んでくることもないだろうに。

しかも、その相手が手強いということも分かりきっているのに。

「彼は裏口から出て行ったと思うわ。追いかけるなら今のうちよ。もっとも、瓶の中身は空になっているかもしれないけれど」

「追いかける気はねえ。今度会ったら落とし前をつけてやる」

壮年の男　シギは、一緒にいる若者に去るように手振りで指示し、先程までピアーズが座っていた椅子に腰を下ろした。

「夜襲、ご苦労だったな」

「ええ、本当に。あんな経験はできればしたくないものね」

「イチかバチかってやつは誰でもやりたくねえもんさ」

シギは給仕を呼び、ビールを一杯注文した。

ディーナは少しずつスープをすすする。

「奴ら、また攻めて来るでしょうね？」

「ああ、おそらく援軍を呼んでな。ハーベックは奴らをヘラルザント平原で迎え撃つつもりらしい」

「ヘラルザント平原……」

「今度は“ガチ”だ。そこでしくじったら、この国も殺られる」

シギは右目に鋭い光をたたえてディーナを見た。

彼の顔は精悍で、草原で生きてきた男の力強さを感じさせる。

「奴らも相当躍起になっている。厳しい戦いになるだろうな」

「勝てる見込みはどれくらい？」

「さあな。俺にも分からんよ。直接ハーベックに聞いてみな」

給仕がビールを運んで来たので、シギはそれを受け取り、豪快に飲んだ。

「ところで、お前の相棒はどうした？」

ディーナは思わず木製のスプーンをぎゅっと握る。

「……帰って来てから会ってないわ」

「珍しいな。お前らはいつも一緒なのに」

「夜襲で疲れてたし。部屋で休んでいるんじゃないかしら」

「何かあったような雰囲気だな。え？」

シギはにやりと笑った。

ディーナのわずかに怒気を含んだ口調に感づいたのだ。

「何も」

「前から聞いたかったんだが、あいつはお前の男か？」

「ただの幼馴染みよ。それ以上でもそれ以下でもないわ」

「ふん、なるほど」

彼は信じていない様子だったが、ディーナは黙って無視する。

「だが、同郷の唯一の幼馴染みだろ？」

「そうだけど、恋人ってわけじゃない」

ディーナはスプーンを置いて席を立った。

もはや食べる気がしない。

「失礼するわ」

「おい、スープが残ってるぞ」

「食欲が無いのよ」

「いつメシが食えなくなるかも分からねえ世の中だぞ」

「分かってるけど、とにかく今は食べたくないのよ。また会いまし

よ」

彼女はシギを置いて食堂を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3912y/>

澎湃

2011年11月10日03時13分発行